

盗賊戦争（1915年8月）

盗賊戦争を象徴するような事件が発生した。後年レンジャースの残虐行為に抗議して立ち上がった弁護士ホセ・トーマス・カナレスが語った事件の内容は次のようなものであった。アニセト・ピサニャとジェフ・スクリップナーはお互いに隣り合わせの牧場の所有者で、二人は長年に亘り反目しあっていた。8月3日の朝、カメロン郡保安官W. T. ヴァンと数人の保安官代理、スクリップナーと数名のアングロ、そして騎兵がピサニャの牧場にやって来た。ピサニャは台所で母親からコーヒーを注いでもらっていた。数人の男たちは家畜の世話をし、少女は朝食の準備、少年は豚に餌をやり、もう一人の少女は水を汲みに行っているところだった。ジェフ・スクリップナーの保安隊は牛の囲いのあるところまで来て、数人の男が建物に駆け込むのを見て、「あそこにいるぞ！」と叫んだ。ピサニャは年老いた母親、弟、右脚に重傷を負った息子を残して逃げた。⁴⁵

この事件に関しテキサス・レンジャースは次のように報告した。8月3日、ブラウズヴィルの北十八マイルにあるスクリップナー農場で奇襲隊が目撃され、未明陸軍第十二騎兵部隊所属の騎兵二十六人が招集された。牧場主ジェフ・スクリップナーは予てより隣の牧場主アニセト・ピサニャにたいして恨みを持っていたと言われている。彼は、この一帯では尊敬されていたピサニャ一家が持つロス・トリトス牧場の家に奇襲隊が匿われている、と当局に通報した。最初の一時間ピサニャと奇襲隊が兵士と保安隊を釘付けにしている間に、更に数名の兵士と保安官が駆けつけた。彼等は約二十五から五十人の奇襲隊をピサニャの家から追い出すのに成功した。保安隊は間もなく百人を越す数に膨れ上がっていたが、奇襲隊を見つける事は出来なかった。騎兵一人が死亡、二人が負傷した。カメロン郡保安官代理モナハンが脚に傷を負い、ピサニャの十二歳の息子は撃たれた脚を切断した。⁴⁶

ブラウズヴィルの弁護士ハーバート・ダヴンポートは、戦いなどと言うようなものではなかったとして次のように言った。騎兵分遣隊、保安官と6人の補佐、その他非常招集された保安隊による攻撃から少年が母の家を必死に守ろうとしていた。一方保安官や軍の将校はフル装備の軍隊どうしの衝突で、少なくとも武装した五十から六十人のメキシコ人騎兵がいたと言った。⁴⁷

ピサニャはただ単に自分の家が襲撃を受けたと言った。アニセト・ピサニャは熱心なPLM支持者で、1904年ラレドでフロレス・マゴン兄弟に面会したことがあり、リヘネラシオンを購読していたが、事件当時未だPSDには加担していなかった。彼は逃亡中PSD奇襲隊に加わる決心をした。⁴⁸

8月4日、ブラウズヴィルの北三十三マイルで鉄道線路の橋桁が焼かれ、電信電話線が切断され、その後修理のために送られた列車が襲撃された。二日後、カメロン郡北部のセバスチャンの小さな集落に十四五名のメキシコ人奇襲隊が侵入した。彼等は小さな店を掠奪し、納屋に火をつけ、トウモロコシの脱穀をしていたアルフレッド・オースティンと息

子チャールスの農場に向かった。オースティンは六年前にヴァレーに移り住んで以来、新しくやって来たアングロの手本とされるほどの成功を収めていた。オースティンは人種差別主義者で、彼の振る舞いに多くのテハノが憎しみを抱いていた。アルフレッドはこの地方の「法と掟」という連盟の会長を務め、テキサスに住むメキシコ人への酷い仕打ちで知られていた。アルフレッド・オースティンは手の遅いメキシコ人を容赦なく蹴った。この襲撃隊の中には彼に虐待された六人のメキシコ人が加わっていた。ネリー・オースティンが台所で働いていたとき、奇襲隊が家の中に突入した。山賊たちは夫と息子を引かずしてネリーの前に現れ、家にある銃器を全て出させると、二人を引立てて屋外に出た。間もなく畑の方から銃声を聞いて飛び出したネリーは、二人が横たわっているのを見た。チャールスは口を撃たれて即死、アルフレッドは背後から背骨の両側を一発ずつ撃たれ、ネリーが駆け付けてから数分後に息を引き取った。

奇襲隊に加わった一部の者の素性が判明した。オースティンの農場に向かう前に襲った商店の店員が、顔見知りか数人居たことを当局に報告した。偶々現地を視察に来ていたレンジャース総務局長ヘンリー・ハッチングスがヘッドおよびランソム両大尉を中心に三十名以上の保安隊を組んで犯人逮捕に乗り出した。彼等は直ぐに、容疑者とされたグスマンの家を探し当てた。8月6日の夜、保安隊はブラウズヴィルから三十マイル北にあるパソ・リアルにあるグスマンの家を取り囲み、グスマンと息子一人を殺した。武器を持たなかった父親は十七発の弾丸を浴びていた。負傷しながら逃げたもう一人の息子は翌朝見つけ出されて殺された。⁴⁹

8月8日、これまでで最も大胆な襲撃事件が発生した。南テキサスの最大規模のキング牧場の中でノリアと呼ばれた区画の管理事務所を六十人の奇襲隊が攻撃した。隊長はルイス・デ・ラ・ロッサであった。デ・ラ・ロッサについて余り詳しい事は分かっていない。彼はブラウズヴィルの北約二十五マイル、ピサニャ牧場の近くの小さな村落リオ・オンドに住み、屠殺業に長年携わり、カメロン郡の保安官代理を務めたことがある。彼はピサニャと同じくPLMの機関紙リヘネラシオンの熱心な購読者で、ヴァレーにおけるフロレス・マゴン主義者サークルのリーダー格であった。この襲撃事件の1915年、彼は五十歳前後であった。ハンティントン図書館が所蔵している、1914年に撮影したと記された彼の写真にはルイス・デ・ラ・ロッサ大尉と記されていることから、彼は明らかにカランサ軍に所属していたことになる。⁵⁰

8月8日、キング農場のマネージャー、シーザー・クレバークはブラウズヴィルにいたとき、彼の農場帝国の一事業区であるサウズ農場の近くで奇襲隊が目撃されたとの報告を受け、直ちに陸軍とレンジャーに援護を求めた。騎兵C中隊からアレン・マーサー伍長以下七人の兵卒、レンジャーからは総務局長ハッチンスとランソム、フォックス両大尉が率いるそれぞれの隊員は、特別列車でブラウズヴィルから七十マイル北にあるキング農園のノリア区画管理事務所へ向かった。軍の分遣隊とレンジャースの出発を眺めていた

カメロン軍保安官代理ゴードン・ヒル、二人の税関検査官および移民官一人は、実戦を予感して次の列車で後を追って、ノリアへ向かった。ヒルの一行が到着した午後五時には、レンジャースは馬の提供を受け、農場の現場監督以下数人のカウボーイと共に奇襲隊を求めて南に向かった。奇襲隊は彼等が過ぎ去るのを藪の陰で見っていた。兵士、保安官代理、税関検査官は六時過ぎ食事を終え、一服しているところ、デ・ラ・ロッサが率いる騎馬の一団が東から全速力で近づいてくるのを見た。最初はレンジャースと思ったが、よく見ると大きなソンプレロの奇襲隊であると知って驚いた。奇襲隊は赤と白の二つの旗を掲げていた。赤は全員虐殺を、白は和平交渉を意味するものと防衛側は解釈した。奇襲隊は二百五十ヤードまで近づくと馬を下りてモーゼル銃で射撃を開始した。四人に一人と、数で圧倒された十六人は線路の脇まで後退して反撃した。

戦闘開始間もなく、三方から攻められ四人が負傷、ライフルは十二丁に減った。二時間半の戦闘後、総攻撃をかけ、建物目掛けて突進した奇襲隊は、リーダー格一人と五人を失い、これで充分と思ったのか暗くなった原野に引き上げていった。彼等がもう少し踏みとどまっていたら制覇できた。ノリアの守備隊は弾が殆ど尽きていた。農場側の死者はテハノの女性一人のみであった。奇襲隊がノリアの建物に近づいたとき、テハノの従業員の家に立ち寄り、何人グリーンゴが居るか、とリーダーが彼女に尋ねた。彼女は「この臆病者！知りたければ自分で調べたらどうなんだ」と罵った。女はその場で口を撃たれた。⁵¹

レンジャー総務局長ハッチンスとレンジャー部隊は盗賊が去って久しい夜十時、戦闘があったことも知らずに戻ってきた。彼等は守備隊員からの話を聴いて哑然とした。レンジャーに死ぬまで尋問された負傷した奇襲隊員は死ぬ前に、攻撃を加えたときは三四人のカウボーイしか居ないと思ったこと、農場の管理事務所を襲撃して金品、ライフル、銃弾、食料や馬具を奪い放火する目的であったことを話した。レンジャースは肝心の戦闘のときに居なかったばかりか、暗夜に待ち伏せ攻撃を受けるのを恐れて、直ちに後を追おうとしなかった。レンジャースは朝から搜索を開始した。奇襲隊は七十マイル離れたリオグランデを渡ってメキシコへ逃れていた。フォックス大尉以下レンジャースは死んだ四人の奇襲隊員を縄にかけて引きずって、レンジャースの残忍さを宣伝しようと、後で物議を醸すことになる写真を撮った。ノリア襲撃事件のあと、ゲリラの首とポーズをとったレンジャー隊員の写真も現れた。⁵²

ノリア攻撃が終わった頃、アニセト・ピサニャはPSDに加わる決心をした。彼は周りに集まってきた六十余名の信奉者を五班に分割した。十人組を三班、六人組を一つ、それぞれを昔の同僚に任せ、自分は残りの二十名を統括した。この中にテオドロと呼ぶ日本人の他に四人の日本人が居たとピサニャは回顧録に記している。日本人はかなり早い段階からサンディエゴ計画に加担していた。⁵³

ノリア攻撃から間もなく、三十人ほどの奇襲隊が旗をなびかせてヒダルゴ郡の西端、ロスエパノスで渡河した。保安官ベーカーは保安隊を組んで三日間にわたり追跡した。奇襲

隊は四十マイル北へ侵入し、東に向きを変え、エディンバーグから南下して河向うへ逃れた。ノリア襲撃事件のあとファーガソン知事はレンジャー総務局長ハッチンスにレンジャースの全員三十九人を南テキサスに配置することを指示し、更に九人増員した。国境から七十マイル北で大規模な襲撃を受けたことで、ジェネラル・フンストンもワシントンの上官もショックを受けた。更にフンストンを驚かせたのは、奇襲隊に誘拐され道案内をさせられた七十五歳のキング農園の従業員、マヌエル・リンコネスの証言であった。解放されたから軍の将校により尋問されたリンコネスは、奇襲隊の半分はメキシコから来ていると言った。フンストンは未だ全容を理解していなかった。カランサ軍の北東地区司令官ジェネラル・ナファラテが明らかに上官の承認なしで奇襲隊の指揮をしていた。メキシコから来ているのはカランサ軍の将校と兵士であった。54

テキサスのみならず、選挙区に土地所有者を抱える他州の上下両院議員からの圧力により、南部軍管区はリオグランデから七十マイル北に広がる一帯に、四十に上る小規模の分遣隊を町や農場に配置することになった。そのためフンストンの軍隊は、河向うから侵入してくる奇襲隊に対し、充分に対応することが出来なかった。8月8日、フンストンはラレドにあるフォート・マッキントッシュから歩兵部隊をライフオード、セバスチャン、レイモンドゥヴィル、ハーリンジェンに配置した。8月9日、メルセデスの灌漑用ポンプの近くで奇襲隊と陸軍パトロール隊との間で撃ち合いがあり、翌日少し西よりのパーム・ガーデンでも衝突があった。結果陸軍兵士一人、奇襲隊員一人が死亡した。奇襲隊はメキシコ＝テキサス解放軍と記した旗と、サンディエゴ計画書を残して引き上げた。河沿いでは十日の夜も衝突があった。55

8月14日、陸軍省は四・七インチ砲二門と、オクラホマの空軍基地から航空機二機をブラウンズヴィルに移す命令をだした。ナファラテの本部へ砲の照準が合わされた。フンストンは八月頃までにはリオグランデ・シティとブラウンズヴィルの間に二千五百人の兵士を配置し、諜報部隊を置いた。この頃のレンジャースは三十数人で、彼等の主な役割は、地域の保安官と協力して奇襲隊を追跡し殺すことであった。軍隊は防衛に専念し、レンジャースは防衛線を抜けて入り込んだ奇襲隊を追跡するという形が出来上がった。同時にレンジャース、地域の保安官、自警団などによる撲滅作戦が勢いを増した。

サンベニートの留置所に、オースティン親子の殺害容疑で捕らえられていた二人は、8月5日、数分間看守が居なくなった隙に連れ出されて殺害された。二人の死体は線路沿いに発見され、焼かれた。五日後、鉄道線路の架橋を燃やし、オースティンを殺した容疑で捉えていたトマス・アギレが逃亡を企てたので殺した、とキャプテン・フォックスが報告している。56

8月16、17日、既に三度に亘って事件が起きたリオグランデの渡河地点の一つ、ヒダルゴ郡東部のプログレッソで百人近いメキシコ人が第十二騎兵部隊の分遣隊を襲い一人の兵士が死亡し、二人が負傷した。8月21日、カランサ軍の脱走兵がマッカレンの南で

河を渡り北へ向かった。ヒダルゴ郡保安官ベーカーとランソム大尉のレンジャース、第三騎兵分遣隊が保安隊を組んで後を追った。加えてサンダース大尉の三人のレンジャースも同じく後を追ってサリタの西で侵入者を見つけた。脱走兵集団は攻撃を加えることはせず、巧みに四日間逃げ回って、追っ手より一時間半早く河岸に到着し向う側へ逃れた。

8月26日、メキシコ軍は河岸に塹壕を掘り、北岸の騎兵分遣隊に向け発砲した。馬一頭が死んだだけで負傷者は出なかった。同じ頃、河から八十マイル北、ブルックス郡ファルフェリアスで四人の奇襲隊が侵入し、保安隊との銃撃戦で一人が負傷し、捕らえられてから死亡した。

8月30日、奇襲隊はブラウズヴィルから十四マイルの地点で鉄道線路の架橋を焼き、さらに近隣の民家数棟に火を放った。彼等はカメロン郡保安官代理ダニエル・イノホサと同僚三人が分乗した二台の車を、ブラウズヴィルからサンベニートに向かう道路わきの藪の中から攻撃したが、待ち伏せ攻撃は失敗に終わった。⁵⁷

アニセト・ピサニャは戦闘に参加するにあたり、テハノやメキシコ人に報復を呼びかけた。ピサニャは土地強奪者やリオブラボーを防衛する卑劣なレンジャースが、連日無力な女子供や老人に対して暴力を振るい、犯罪行為を行っていることに義憤を表明するピラをメキシコ側から配布した。テキサスのメキシコ人へと題したピサニャのピラは誑者や耳を傾ける者の人間愛や愛国心に訴えた。ピラは「もうこれ以上我慢できない。グリンゴから屈辱を受けるのはもう沢山だ」としてサンディエゴ計画に沿って戦うことを宣言し、「独立万歳」と締めくくった。ピラには総司令部の所在地をサンアントニオ・テキサスとし、最高司令官ルイス・デ・ラ・ロッサ、副司令官アニセト・ピサニャと記されていた。このピラによりデ・ラ・ロッサとピサニャは全国的な注目を集めることになった。ロス・トリトスの襲撃事件から一月後、奇襲部隊を率いてテキサスへ戻ったピサニャは激しい攻撃を開始した。⁵⁸

45. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego 1904-1923, University of Oklahoma Press, 1992, P88
46. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P261
47. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P89
48. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923, University of Oklahoma Press 1992, P72
49. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P261
50. Ibid. P264
51. Ibid. P264
52. Ibid. P265
53. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P90
54. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P267
55. Ibid. P268
56. Ibid. P269
57. Ibid. P277
58. Ibid. P278